



何さら聞けない...

教育用語

Q & A

..... Vol.6



Q1 “アクティブ・ラーニング” って、どういうこと?

学習指導要領の改訂の話題の中で、この言葉をよく聞きますが、どういう意味なのでしょう?

どうい経緯で、この言葉が出てきたのでしょうか?

アクティブ・ラーニングを直訳すると、「能動的学習」となります。もともとは大学の授業で使われている用語ですが、次の学習指導要領を改訂する際、教師が一方的に知識を教え込むような教授型の授業を変えることを強調するために使われています。課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に学び、知識・技能の習得はもちろん、思考力や表現力も高めていく学習のことを言います。

学習指導要領の改訂は次のような手順で進められます。

文部科学大臣が中央教育審議会に「諮問」する

中央教育審議会が改訂の「答申」をまとめる

「答申」に基づいて学習指導要領を改訂する

上記の「諮問」の中で、学校教育の重点を
▶「何を教えるか」→「何ができるようになるか」
に大きく転換することが打ち出されました。そのため
に指導法を見直す必要があるとされ、その重点の1つ
として“アクティブ・ラーニング”という学びの在り
方が示されました。

これまでも、児童の主体性を重視した
指導を工夫してきましたが.....

その通りです。特に小学校では、問題解決学習を重視し、児童が自ら課題を発見して、自分で考え、それを友だちと比較・検討しながら解決する指導を工夫してきました。ここであらためてアクティブ・ラーニングという言葉が強調されるのは、大学で多く行われている教授型の授業を学生主体の授業に改善していこうという国の動きによるものです。生徒が受け身の授業では、真に生きて働く「学力」の育成にはつなげていないという反省のもとに出てきた言葉なのです。

小学校では.....

これまでは、「総合的な学習の時間」で課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学び合う学習を実践してきました。また、どの教科でも言語活動を重視し、教科の枠を超えて、習得した知識・技能を活用する学習経験を重視した指導を工夫してきました。今後は、各教科等の授業の中で主体的・協働的に学ぶ活動や言語活動の意義を再度確認し、実践研究を深め、その成果を日常の授業で活用していくことが求められていきます。



アクティブ・ラーニングの視点から、どのように授業改善をすればよいか
文部科学省教科調査官(算数・数学)の笠井健一先生に、伺いました。

次の3点の視点から、これまでの授業実践を捉え直すことが大切だと思います。

- ▶習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。
- ▶他者との協働や外界の情報との相互作用を通じて、自らの考えを広める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- ▶児童が見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

問題解決をさせた授業のあとなどに学習をふり振り返り、学んだことを確認したり解決のポイントをまとめたりすることは、今までもやっていることですが、先生がただやらせているのではなく、“この学習活動を、児童の主体的な学びにつなげていくんだ。”“児童が、ただ分かるだけでなく、『できる!』『実際にできるようになった!』ということにつなげていくんだ”という意識で意味づけを捉え直すということが、算数の授業をアクティブ・ラーニングにしていく鍵なのではないかと思います。

Q2 “主体的・協働的な活動” って、どういうこと？

主体的・協働的な活動と
そうでない活動の違いは？

主体的・協働的でない活動

児童の興味・関心に関係なく、教師が課題・めあて、そして解決の方法までを与えて活動が進む授業。つまり、児童が「何のために」「何について」「どのように」という意識をもたずに受け身で進める活動。こうした活動では、友だちとの「協働」の必要性が生まれにくい。



主体的・協働的な活動

児童が「何のために」「何について」という課題意識を自らもち、「どのように」という解決の方法も意識して行う活動。学級内でも課題意識が共有されているので、「協働」の必要感が高まり、自ずと学び合いの必然性が生まれ、その質も高くなる。



主体的・協働的な活動の
実践のポイントは？

問題解決の学習過程を重視する。

問題（課題）を見いだす
それを解決するための見通しを立てる
見通しを検証しながら自力解決する
自分の考えを友だちと交流する
学級全体で ～ を通して明らかになったことを整理し、まとめる

まず、授業をこのような流れに構成することが協働的な学習の前提です。

一斉の学習形態に終始する授業を変える。

上記の問題を見いだす場面でも、「何が問題となるか」、例えば隣の友だちと「なぜ」と思うことを意見交流する。

の場面で、解決方法について、小集団で比較・検討する。

自力解決の途中で、情報を交流する。

共通点や相違点、その根拠などの視点を明確にして、3人組や4人組で考えを説明し合い、よりよいものに整理する。

など、問題解決の学習過程の各段階で、意図的に協働する活動を取り入れていく。

Q3 “カリキュラムマネジメント” って、どういうこと？

学校教育目標の実現に向けて、児童や地域、教師などの実態を踏まえて、教育課程（カリキュラム）を編成・実行・評価して改善を進める、いわゆるPDCAサイクルを意図的・計画的に、そして組織的に進めていくこと。また、そのために必要な人、もの、予算、情報、時間などの条件整備をすることです。その基盤には、教育目標の実現という共通の目標に向かって、教職員一人ひとりのよさを発揮しながら組織的に職務を行う課題意識が共有されていなければなりません。



学年経営・学級経営や教科経営を、学校経営・教育課程とつなぐ。
一人ひとりの教職員をつなぎ、「協働」の関係性を作る。



アクティブ・ラーニングを重視した教育活動を実践化するには、カリキュラム全体の構造に目を向けていかなければならないということですね！